

大豆の病害虫防除と乾燥対策

令和8年8月

東部振興局生産流通部 地域営農・水田活用班

○ハスモンヨトウ

- ・ハスモンヨトウは葉を加害（白変葉）し、被害が拡大すると大幅な減収となる。
- ・防除適期は「白変葉を見つけた時」
幼虫が大きくなると薬剤効果が低下する。
幼虫が小さい時に防除するのが重要。
- ・2回目以降の防除は薬剤感受性低下を防ぐため、異なる系統（IRACコードが違うもの）の農薬を使用する。



農薬例（農薬名）	IRACコード	希釈倍率
グレース乳剤	30	2,000～3,000倍
ブロフレアSC	30	2,000～3,000倍
フェニックス顆粒水和剤	28	2,000倍
ノーモルト乳剤	15	2,000倍



※1：10a当たりの散布水量（100～300L）

※2：ノーモルト乳剤は、幼齢幼虫期に散布

○過乾燥対策

大豆は・・・

水稻より水を必要とする作物（要水量が大きい作物）

湿害に弱い



乾燥に弱い

大豆の根への酸素供給は根群域の
空気に依存するところが大きい

だから…

不要な水は排水しないといけない
＝排水対策が重要

特に干ばつ被害を受ける時期

- ①開花～着莢：落花・落莢による減収
- ②子実肥大期：粒重低下による減収

※①：8月中下旬、②：9月下旬～10月下旬



空気と水の供給バランスが多収のポイント

★雨が降らない日が続く場合は・・・暗渠栓を閉める

★開花期以降の干ばつは減収・品質低下につながる
⇒開花期以降に晴天が一週間以上続き、葉の裏面が目立つ場合は

・・・畝間灌水
※可能な場合のみ

○紫斑病

- ・ 種子表面に紫斑が生じる
- ・ 葉、莢、種子に症状が発生する
- ・ 開花期や成熟期に雨が多いと発生が多くなる
- ・ 病原菌は糸状菌の一種で、罹病種子や被害茎葉で越冬する。種子更新、種子消毒、適期防除、輪作などで対策を行う。
- ・ 防除は下記のカメムシ対策と同じ時期に行う



種子の病斑



葉の病斑

○カメムシ

- ・ 大豆が登熟する途中に、子実を吸汁する。
- ・ 子実が小さい時期に吸われると莢落下や種皮だけが残る。
子実が大きい時期に吸われると黒い斑点や子実が変形する。
- ・ 被害が大きいと収穫期を迎えても黄化せずに青立ち状態で収穫できない。
- ・ 防除は紫斑病の薬剤との混合散布による同時防除ができる
(下記参照)



大豆の葉に群がる
カメムシ



R7.11.11撮影
(黄化)



R7.11.11撮影
(青立ち)

青立ちしてしまうと
これまでの栽培管理が
無駄になってしまいます...



紫斑病とカメムシの防除方法（農薬例）

時期	農薬例	
	(殺菌剤)	(殺虫剤)
1 回目 (開花期後12～24日)	アミスター20 フロアブル	ニマイバー 水和剤 ※1
2 回目 (1 回目散布の10日後)	スタークル 液剤10	キラップ フロアブル

※1 ニマイバー水和剤は、エトフェンプロックス乳剤（商品名：トレボン乳剤等）ダイアジノン乳剤と混用した場合、凝固物を生成するため混用をさけること